

中世の捨て子論

はじめに

現代社会において捨て子はマイナスイメージしかないが、中世社会においては子どもを「捨てる」という行為に特別な意味合いがあった。

例えば、川や海、または山、橋、門、路、松といった捨て場所
は当時においては「縁を切る境界」とされていた。親が子どもを
境界に捨てるのは親子の縁を絶ち、現世との縁を切るためであつ
た。大喜直彦氏¹⁾によると、

現世と縁を切ることは捨てた子が死んで他界に帰る、また現
世で新たな縁を結ぶ²⁾と拾われるということを意味していよう。
とある。境界に子どもを捨てるのは、死んだのちに生まれ変われ
るように、別れても新たな出会いがあるように（誰かに拾っても

小 田 葵

らえるように）という願いが込められていた。また、聖なる仏像
が橋下、山間、河辺の砂の中といった境界に捨てられることもあつ
た。子どもが聖なる仏像と同じ境界に捨てられるのは、神仏と並
んで神聖視されていたからといえる。

子どもを疎ましく思つて拾つてもらふことを望まない場合もあ
る。『伊吹童子』に、

「かの父弥三郎殿邪険放免におはせし故に、そのことの恐ろし
さに、今この稚児を憎むものなり……さらば汝かの稚児を伊
吹山に連れて行、山林に捨て置き帰るべし」とぞ申されける。
即ち、夜に紛れ、かの童子を相具し、伊吹山に至りつゝ、人
も通はぬ谷底の岩のはざまに捨て置きけるこそ無残なれ。

とあり、伊吹山の人通りのない谷底に捨てられている。人に害を
及ぼすと危険視された子どもは隔離されたのである。

捨て子の特徴として、岩本通弥氏は「普通の子どもとは何かしら異なつたスティグマ（聖痕）を負つた者」で「異常な出生・成長が親や先祖の業報の表れ」であり、「捨子とは、家の災いを取り除く一種の厄落としとしてその繁栄を保障する贖罪であつた」と論じている。この論より示された捨て子の特徴を子どもが捨てられ売られた理由、捨て子に課せられた役割などから具体的に検証していきたい。

一 歴史が伝える捨て子・子売り

子売りの最も古い記録は、『日本書紀』の天武天皇五年（六七六）「下野国司奏す、所部の百姓凶年に遇ひ、飢て子売らむと欲す。而して朝ゆるしたまはず」である。領内の百姓が凶年による飢えで子どもを売ること認めてほしいと言つたので、下野の国司が奏上したのだが、朝廷は許さなかつたとある。それが僅か十五年後、持統天皇五年（六九二）には「もし子、父母のために売らるる者は賤に従へ」と朝廷はその方針を覆し、親が子どもを売ることとを黙認している。⁽³⁾ 親が子売りや子殺しによつて受ける懲罰は、『養老律令』（七五七）より明らかとなつてゐる。例えば、同じ子売りでも子どもに承諾を得て売るのはよしとされ、親は杖による百叩きという罰則で済んだ。親による子殺しについては故殺であるの

にも関わらず、二年半の刑に服するのみで、過失であれば無罪という殺人罪としてはあまりにも軽すぎるものであつた。⁽⁴⁾ 『日本書紀』『養老律令』のような曖昧な捨て子・子売り禁止令はその後も度々出されたが、飢饉に比例して禁じられたり、解かれたりとは不安定であつた。ただし、江戸時代に入ると捨て子や子売りの禁止令は強化される。岡山藩は子どもをいつわつて乞食に出した者を死刑にし、加賀藩では子を捨てた者が磔に処せられた例もある。⁽⁵⁾ 奈良時代の杖による百叩きとは比べ物にならないほどの厳罰に処される時代となつた。

天災や戦乱による飢饉を理由にした子どもの売買や子捨ては、中世の頃より犯罪性を帯びたものとなる。子どもを誘拐して売る人商人「子取り」が社会を揺るがせたのだ。子売りが事件として取り上げられ、人々の噂となつた話は『後法興院記』⁽⁶⁾の明応七年（二四九八）五月十五日の条に、

近日鬼出来し、小児を取り食ふべき由、その告げあるにより、七歳より内の小児、男女上下悉く巡礼の体に出立ちて、清水寺、或いは講堂に参詣せば災を通るべしと云々、これにより競ひ参ると云々、近頃奇異の事なり、筆端に尽くし難しとある。鬼の標的となるのは、悪霊に憑依されやすく、神隠しにも遭いやすい七歳以下の子どもである。この噂が広まる四五年前

の享徳二年（一四五三）にいもやみが京洛で流行して亡くなる子どもが多かったとあり、三七年前の寛正二年（一四六一）には疫病と飢餓によつて道路が死骸で埋めつくされたとある。鬼は疫病や飢饉の象徴とされる説があるが、実際には子どもの労働力に目を付けた子取りといわれる人商人のことである。疫病や飢饉の非常時においては取り沙汰される余裕のなかった犯行が、中世に入つて露見してきたといえる。

鬼の正体の子取りだということは、『看聞日記』⁽⁹⁾の永享五年（一四三三）四月四日条に、

そもそも聞く、この間、洛中洛外に子を取る者あり、諸方に

おいてこれを取る。誰人の所為とも知らず、男・女房・僧・

聖等これを取る、或いは子を取り返し、或いは打ち殺さると

云々、悪瘡薬の料に取ると云々

とあはかれている。『看聞日記』には「取り返し」「打ち殺さる」ともう一つ「悪瘡薬の料に取る」という誘拐動機がある。中世には子どもの臓器を治療薬として用いたのであり、それは「児干」と呼ばれて秘密裏に取引される薬であつた。特に生まれたばかりの胎児は再生能力が高く好まれたのであり、堕胎や流産した妊婦から入手していたという。『今昔物語集』巻二十九第二十五話の平貞盛は六月月の妊婦の腹を裂いてまで胎児を得ようとしており、

「児干」の効能は絶大と信じられていた。そのため、高値で売れる児干を入手する子取りが暗躍し、児干を求めるためには手段を選ばなかった。平貞盛の話は物語であるが、史実にも子どもが治療薬として服用されたことが残っている。建久九年（一一九八）五月の出来事で、

件の医師、児干を以て遠志に服せしめ了んぬ、それ児干は、これ死人なり、しかるに社司の身として口（死）人を食せしむるは、上代未聞の所行、言語道断に至る次第なり、あに死人を食して神役を仕るべけんや、神慮の恐れ、且つ景迹を垂らむべし

事故で疵を負つた中臣遠忠が春日正預という社司の身でありながら、児干（死んだ子どもを薬にした）を服用したので問題になった。不浄を忌むべき社司が死人を食べるというのは前代未聞の行為で、鬼ではなく人間が子どもを食べていたのである。そして、負傷者の多かつた戦国期より登場してきた金瘡医の秘伝書にも児干を治療に用いたとあり、売られた子どもが児干として出回ることが多かったといえる。

『後法興院記』の「小児を取り食ふ」鬼の正体は、疫病・飢饉のほかに「子取り」と呼ばれる人間であつた。中世社会では、子どもが労働力や治療薬として価値を持つ存在となつたので子取りが

流行したのである。飢饉、戦乱によつてやむをえなく子売りをしていた人々⁽¹⁰⁾の中で、人商人が子どもを商売道具にしますと子売りは次第に悪質なものへと変わつていった。

二 捨て子物語

捨て子が多発した時代に捨て子物語が流行するというのは捨て子を正当化し、助長しているという背景を論じてきたが、どうもそれだけではないらしい。中世の人々が子どもを捨てるのには他にも色々理由があるようなのだ。

例えば、『拾遺往生伝』巻上・十六に、

沙門源算は、因幡国の人なり。その母懷孕の間、身心恙多し。誕生の時、もて不祥なりとなす。これを路の上に棄てて、更にまた顧みず。馬牛去りて踏まず、鳥獸来りて傷らず。三日死なず、一身猶し全し。隣の人これを憐びて、遂にめて収め養ふ。

とあり、五体満足の子どもが出産の不祥を理由に母親に捨てられている。源算は馬牛に踏まれず、鳥獸の餌食にもならず、生き残るという奇瑞を起こして隣人に拾つてもらふ。(実際には、捨て子のお大半が野犬や鳥獸に襲われて死に至ることが多かった。)成長した源算は出家した後には往生人となっている。このように異常な誕

生を遂げて捨てられた子どもが偉業をなし、偉人となる物語にについては後述で触れる。

一寸法師もまた両親の身勝手で見捨てられた子どもである。一寸法師は子のない老夫婦が住吉明神に祈願して誕生した子どもで、一二、三歳になつても身のたけ一寸と背が伸びなかった。そのため、老夫婦は「普通人にてはあらざれ。ただ化物風情にてこそ候へ」と一寸法師を人外のモノとして気味悪がり追い出してしまふ。老夫婦も始めこそ「住吉より給はりたるぞや」と一寸法師を神仏の申し子として喜んでいたのだが、いつまで経つても小さなままの一寸法師に「いかなる罪の報いにて」と住吉大明神に願掛けしたことを悔やむのである。古くは、身体に直接障害がなくても、願掛けをして生まれてきた子どもは人ではない異界のモノであり、一方で神仏の申し子とみなされていた。⁽¹¹⁾異常誕生した子どもや障害を持った子ども、異界や神仏に近い子どもが捨てられたのである。『日本霊異記』巻上第三十話「行基大徳、子を携ふる女人の過去の怨を視て、淵に投げしめ、異しき表を示しし縁」においても、障害を持った子どもが淵に投げ捨てられる。

……一の女人有りき。子を携へて法会に参る往き、法を聞く。其の子、哭き謹びて、法を聞かしめず。其の児は、年十余歳に至るまで、其の脚步まず。哭き謹びて乳を飲み、物を噉ふ

こと問むこと無し。大徳告げて曰はく、「咄、彼の嬪人、其の汝が子を持ち出でて淵に捨てよ」といふ。

女が連れていた子どもは十歳を過ぎても歩くことのできない障害児であつた。行基に「子を淵に捨てなさい」と言われるが、女は可愛い我が子を捨てることができなかつた。次の日も、女は子どもを連れて説法を聞きにくるが、子どもがやかましく泣き喚くので女のみならず他の聴衆たちも説法が聞けないという有様になつてしまつた。女は行基に再び「子を淵に捨てなさい」と言われ、うるさい泣き声に耐えかねて淵に投げ捨てる。すると、投げ捨てられた子どもは、

児、更に水の上に浮き出で、足を踏み手を攢り、目大きに瞻り暉て、慷慨みて曰はく、「惻きかな。今三年徹り食はむに」といふ。

と本性を表わして母親に恨み言を言う。この怪奇現象について行基は、女が前世で物を借りて返さなかつたために貸主が現世で子どもの姿となつて負債を取り立てるのだと教えた。子どもの魂には前世からの怨念が宿ることもあつた。この物語は前世との因縁を断ち切るために子どもを捨てることの必要性を説いている。また、子どもを水に投げ捨てるのは古来よりの水神信仰や治水工事に伴う人柱の風習が関係しているという。¹⁷⁾ 水は穢れを祓い清める

ものであり、河や海から神々が来臨すると信じられていた。行基が子どもを淵に投げ捨てさせたのは穢れを清める水の中で子どもの正体を暴くためであつたのだ。

同様に『古事記』と『日本書紀』には、イザナギノミコトとイザナミノミコトの間に生まれた子どもが三年経つても歩くことのできない蛭子で、水辺に捨てられたことが記される。蛭子が生まれた原因は、女神のイザナミから男神のイザナギにアプローチしたからだとされる。古代社会では、「女人先に言へるは良からず」と女性が男性を誘うことは無作法とされていた。禁忌を犯してイザナミが生んだ蛭子は、神の怒りに触れた子どもとみなされて「其の児をつつみて渚に置きて、即ち海に入りて去ぬ」と海に投げ捨てられた。生まれた乳児を何かに包んで水に投げ入れるというのは、浮かべば正しい出生で、沈めば不正な出生とする習俗が当時にあつたと考えられている。¹⁸⁾

障害を持つた子どもは前世の悪業や禁忌を戒める存在であると同時に、両親に善果をもたらす存在でもあつた。『日本霊異記』巻中第三十一話「塔を建ててむとして願を発しし時に、生める女子の舍利を捲りて産れし縁」に、

「嫗、時に非ずして子を産み、根具らず。斯れ大きな恥とす。因縁を以ての故に、汝、我が子に生る。」といふ。迺嫌ひ棄

てずして、慈び哺し育む。

とある。母親である姫は左手を握りしめたまま開くことのない子どもを産んで恥ずかしいと思ひながらも、捨てることをしない。むしろ、前世からの縁だといつて子どもを大事に育てる。このような「酒か嫌ひ棄てず」という物語の展開は一般的に障害の子どもは捨てられて、それが許されていた社会が前提にあつたからだ。と米山孝子氏は述べている。姫の障害児に対する態度は前述の『一寸法師』とは対照的で珍しいものだったということになる。願掛けによつて生まれた神仏の申し子で障害児という設定は『一寸法師』と同じである。また、高齢出産は世間的に恥とされるもので異常誕生の話し型によく見受けられる。物語の続きに戻り、捨てられずに育てられた子どもは七歳になると握つていた手を開いて母親の姫に見せる。七歳になつた途端に手を開いたのは神仏の申し子でいられる年齢が七歳前後とされて、それを超えないためであつたと思われる。開かれた子どもの中には「舍利二粒」があり、両親は七重の塔を建ててその仏骨を安置して供養する。その直後、「塔を立てし後に、其の子忽ちに死にき」と女兒は自らの命と引き換えに両親の悲願を達成させる。米山孝子氏は、この女兒が捨てられなかったが故に七歳までしか育たなかったことを指摘しており、捨てられることで命が救われる子どもの特性を説い

ている。

三 卵生説話

子どもは母親の母胎から産まれるとは限らない。特に捨て子は奇妙なところから誕生してくる場合が多い。『日本霊異記』巻下第十九話「産み生せる肉団の作れる女子の善を修し人を化せし縁」に、一つの肉団を産み生しき。其の姿卵の如し。夫妻謂ひて祥に非じとして、筒に入れて山の石の中に蔵め置く。七日逕て往きて見れば、肉団の殻開きて、女子を生めり。父母取りて、更に乳を哺めて養しき。……八箇月経て、身俄に長大り、頭と頸と成り合ひ、人に異りて頼無し。身の丈三尺五寸なり。生知り利口にして、自然に聡明なり。七歳より以前に、法華八十花嚴を転読せり。

とある。卵型の肉塊を不吉と感じた夫婦は山中に置いて我が子を手放すのだが、七日後に様子を見に来ると女兒が生まれていたので連れ帰る。摩訶不思議な誕生が幸いして女兒は両親に育ててもらえるという話である。まず、卵型の肉塊を石の中に置くというのは白や棚の上に赤ん坊を隠したり、鎮座させる風習と関係していると思われる。幼兒は閉じられた空間で熟成されるといふ説があり、夫婦は卵型の肉塊を孵化させる（子どもを誕生させる）た

めに石の中に置いたと考えられる。このことは『西遊記』に、

海の中の花果山の頂上に巨石が転がっていた。この巨石は太陽の精華と太陰の精髓を吸収して石の胎内に魂を宿し、とうとう石が裂けて中から卵が生まれた。まもなくこの石の卵が割れて石猿が生まれた。これが、孫悟空であった。

とあり、太陽と月の力を吸収した石の力によつて卵型の肉塊から人間が誕生するという思想があつたことがわかる。また、石とは異なるが、卵を納める箱やその箱を包む布の存在が井本英一氏によつて指摘されている。

新羅の脱解王の伝説では、王妃が生んだ大きな卵を箱に入れて流した。それが漂着して開けてみると男の子が出てきた。

この子が脱解王となつたのであるが、王の時代、紫色の雲が空から地面に垂れさがり、雲の中に黄金の櫃が木の枝に掛かつていて光を発し白い鶏が木の下で鳴いていた。王が櫃を開いて見ると中に男の子が横になっていて起き上がった。この子が金閼智である。

首露王の伝説では卵の入つた合子(箱)は赤いふろしきでつつまれていた。

卵を覆う箱と布は子宮や羊膜を表わしているという。すると、卵型の肉塊は卵が母胎に近付いたイメージだと考えられる。母胎と

の関係性については、『日本往生極楽記』の行基の誕生説話に、

行基菩薩は、俗姓高志氏、和泉国大鳥郡の人なり。菩薩初めて胎を出でしとき、胞衣裏み纏れり。父母忌みて樹の岐の上に閣げつ。宿を経てこれを見るに、胞を出でて能くもの言ふ。収めて養へり。少年の時、隣子村童と相共に仏法を讃嘆せり。

余の牧児の等、牛馬を捨てて従ふ者、殆に数百垂むとす。

とある。『日本霊異記』巻下第十九話のパターンに通じており、行基は誕生の際に胎盤に包まれていたことが父母に忌避されて、一度手放されている。胎児を分娩するとともに排出される胎盤は血だらけで原形をとどめないであり、そのイメージは肉塊に繋がる。胎盤は、母胎と胎児の間で栄養や呼吸、排泄の機能を媒介する。井本英一氏のいう子宮や羊膜というのも胎児を育てたり、守ったりする器官である。つまり、卵型の肉塊が母親より産み落とされた後に胎盤のような役割を果たして胎児を育てていたといえる。卵型の肉塊が石の中に置かれたように胎盤に包まれた胎児も樹の股の上に置かれている。木の上に置くのは人間が木から生まれるという觀念によるもので、『古事記』(上巻)にオホクニヌシノ神の子をみごもつた稻羽のヤガミヒメは生んだ子どもを「木の俣に刺し挟みて返り」とある。そして、肉塊の殻が割れたのが七日後であつたように、行基の話においても一日経つて様子を見てみる

と胎盤から胎児が産まれ出たので育てることにしたとある。

さらに、卵生でなければいけない理由として、人間は動物や石、卵などに魂を宿して何度か転生を繰り返さなければ、人間として誕生することができないという風習があった。中国の『荊楚歳時記』⁽²⁰⁾に、

元旦を鶏となし、二日を狗となし、三日を羊となし、四日を猪となし、五日を牛となし、六日を馬となし、七日を人となす。

とある。鶏↓犬↓羊↓猪↓牛↓馬と魂が転生していつて、七日目に人間として生まれ変わると信じられていた。人間が一番初めに魂を宿す動物は鶏であるが、その鶏は卵から産まれるので卵自体も魂が宿る器といえる。『荊楚歳時記』には、動物（人間ではない）から人間になるまでの転生期間が「七日間」とあり、『日本霊異記』巻下第十九話の肉塊の殻が割れて女の子が生まれるまでの期間と同じ日数である。肉塊の子どもは七日間の転生を卵型の肉塊のなかで繰り返して生まれてきたと考えられる。

『日本霊異記』巻下第十九話の結末には、

(一) 舍衛城の須達長者の娘が卵十個を産み、その卵から男児十人が誕生した話

(二) 迦毘羅衛城の長者の妻が一つの肉団の塊を産んで七日

後、その肉の塊が破れて百人の童子が産まれた話

※(一)(二)の子どもはみな出家して、阿羅漢果の悟りを開いている。

の二つが挿入されており、正式に卵生説話を題材としていることが示される。注目すべき点は、挿入された二つの卵生説話には卵や肉塊を手放す描写がないのに対し、『日本霊異記』第十九話で卵型の肉塊を一度手放す（捨てる）話が追加されていることである。これについては、米山孝子氏⁽²¹⁾が

我国における異常出生譚傳承に仏教的実在感を与える為、經典等で伝えられている卵生出産の例を示したものと思われる。と論じている。つまり、国民に馴染みのある異常誕生や捨て子の物語に、經典などのモチーフを取り入れて仏教説話化したのが、『日本霊異記』第十九話だといえる。

肉塊より生まれた子どもは「八箇月経て、身俄に長大り、頭と頸と成り合ひ、人に異りて頼無し」と障害児であったが、「生知り利口にして、自然に聡明なり。七歳より以前に、法華八十花嚴を転読せり」と七歳に満たない年齢で法華経と八十華嚴経を読誦するほど聡明であった。成長した後は尼となつて「聖の化なることを知りて、更に名を立てて、舍利菩薩と号く」と神仏の化身に喩えられて民衆を教え導いている。異常誕生をした（卵生を含む）子どもは脱解王や首露王のような国王や行基のように幼少時より

仏法を讃嘆し、数百人を教化する高僧もしくは神通力を操る孫悟空といった英雄となる傾向にある。偉人には異常な誕生や捨てられるといった試練がつきものである。

例えば、行基の出自について見てみると、卑賤な者であったり、王族の血筋を引く者であったりと二つのパターンがある。まず、卑しい出自だとするのは『沙石集』に「行基菩薩ハ……薬師ト伝下女ノ腹ニ宿リ給ヘリ」とあり、『行基大菩薩行状記』には「衆生利益のためには、菩薩の道にとどまる。かるがゆえにしばらく下位の母胎に託生して。終に吾朝の貴賤を虚脱す」とある。⁽²²⁾ 行基が下女の母親から誕生するのは身を棄した状態から聖人となるためとされる。どちらも母親が貶められており、父親は名前のみで系譜は記されていない。父親の系譜が分かるのは『行基年譜』⁽²³⁾であり、父親である高志貞知が漢朝の王胤で貴種と示されている。この場合、行基の出自も王胤や貴種とされる。『行基年譜』の母親については「譬えば媼女の高祖を産むが如く、猶し鹿母の獣腹に宿せるに似たり」とある。下賤の身あるいは獣腹の母胎であろうと、漢の高祖や梵王の鹿母夫人のような貴人と同等の子どもが生まれてくるという意味である。漢の高祖は母の劉媪が竜と交わり懷妊しており、鹿母夫人は雌鹿が梵志の精をなめて産まれたのであり、いずれも異常誕生の例である。⁽²⁴⁾ 異常誕生の子どもには、王や貴人

の血が流れていると考えられていた。自分の出自が高貴な血筋であるという誇大妄想と、実の両親を否定してむしろ貧しい家に出自を求める矮小妄想が行基の説話にみられる。⁽²⁵⁾ 誇大妄想や矮小妄想によつて極端な誕生をする子どもは英雄や聖人となる運命にある。異常誕生（卵生）は偉人伝や英雄神話の一部として語られるものでもあった。

おわりに

中世日本社会は飢饉や疫病によつて子どもが半ば強制的に捨てられ、売られるといった問題に加えて子売りが深刻化した時代である。現実には絶望的な捨て子の将来も物語として描かれれば、偉人や聖人といった人物へと成長して夢のような展開を見せてくれる。ただし、異常誕生や障害児ゆえに捨てられるという不遇を乗り越える必要があった。死と隣り合わせの捨て子が世に溢れる中で、この希望に満ちた展開が人々の心に響いて捨て子物語の流行に繋がったといえる。現実には不可能でも物語の中でくらしい子どもが救われて幸せになる、そういった明るい話を人々は自然と求めていたのかもしれない。

前世からの因縁や宿願は異常誕生の原因となつて、障害という形で子どもが両親の代わりに背負うことになる。障害児は普通の

子どもが持ち得ない奇跡的な力でもって両親に禍福をもたらすのであり、それゆえに捨てられた。神仏の顔色を窺った子捨ても存在し、儀式的におこなわれていた可能性を考えられた。

本稿で取り上げた卵生は、一度捨てられて再び拾われるというパターンが他の捨て子物語と比べて異例であった。また、国王や聖人が一般人とは一線を画した人物であることを裏付け、際立たせるために異常誕生や捨て子という設定が物語に組み込まれた。

このように、日本中世は捨て子をプラスイメージで捉え、捨て子に幻想を抱いた時代であったといえる。

注(1) 大喜直彦『中世の捨て子』(『日本歴史』八月号第六一五号・吉

川弘文館・一九九九)

(2) 岩本通弥『捨て子・民俗』(『大百科事典』八・平凡社・一九八五)

(3) 南川泰三『小さな杭 子育て、子殺しの系譜』(株式会社プロンズ社・一九七三)

(4) 森山茂樹・中江和恵『日本子ども史』(平凡社・二〇〇二)

(5) 塚本学『生類をめぐる政治―元禄のフォーークロー―』(平凡社・一九八三)

(6) 斉藤研一『子どもの中世史』(吉川弘文館・二〇〇三)

(7) 疱瘡、天然痘の別名。

(8) 『一遍聖絵』や『春日権現験記絵』で荷物の運搬をする子どもが描かれ、『今昔物語集』に鎌をもった草刈りをする子どもの話がある。働き手としてそれなりに子どもが重宝されていた。(斉藤研一『子どもの中世史』(吉川弘文館・二〇〇三))

(9) 注(6) 参照

(10) 人身売買の文書に「餓身ヲ助からんかためにて候上、此童も助かり、わが身ともに助かり候(元徳二(一三三〇)年三月二十五日付草木莊住人藤六・姫夜又女子息童売券、『賀茂神社文書』と記されるように、子どもを売って生活に潤いをもたらそうというのではなく、人身売買に一縷の望みをかけた人々もいた。(黒田日出男『絵巻』子どもの登場中世社会の子ども像(河出書房新社・一九八九))

(11) 注(1) 参照

(12) 米山孝子『行基説話の生成と展開』(勉誠社・一九九六)

(13) 森山茂樹・中江和恵『日本子ども史』(平凡社・二〇〇二)

(14) 注(11) 参照

(15) 柳田國男『柳田國男全集九』(筑摩書房・一九九〇)

(16) 浅見徹『玉手箱と打出の小槌』(和泉書院・二〇〇六)

(17) 井本英一『卵生神話とその背景』(『王権の神話』・法政大学出版局・一九九〇)

(18) 注(11) 参照

(19) 注(11) 参照

(20) 注(16) 参照

(21) 注(11) 参照

(22) 注(11) 参照

(23) 注(12) 参照、『行基年譜』は行基三七歳までの前半部が欠落しており、編者である泉高次氏の跋文による。

(24) 注(12) 参照

(25) 大塚英志『捨て子』たちの民俗学―小泉八雲と柳田國男(角川書店・二〇〇六)

(二〇一一年 卒業)